

# 発達障害児・気になる子を支える行事

幼児教育選修 玉腰 都梨

## 1. 研究の目的

近年、保育の現場において、「発達障害児」や「気になる子」という言葉をよく耳にする。そのような子どもは、一人一人個人差があり、特徴、種類、程度が異なるため、保育者は関わりに悩んでいる。研究を進めるにあたって、筆者は運動会や生活発表会などの行事に着目した。近年、大人の意識が先走った行事の例をよく耳にする。行事の意義やありかたは、どうあるべきか、興味をもったためである。またこのような行事は、非日常の典型であり、発達障害児や気になる子にとって負担になり得ると考える。そのような子どもを担当する保育者にとっても少なからずプレッシャーを感じる人もいるであろう。発達障害児・気になる子が行事を楽しむために保育現場では実際どのような援助が行われているのか、どういった子どもの姿が見られるのかについて研究を進めた。

## 2. 発達障害児・気になる子について

発達障害とは主に比較的低年齢において発達の過程で現れ始める行動やコミュニケーション、社会適応の問題を主とする障害である。自閉症スペクトラム障害・注意欠陥多動性障害・学習障害が含まれる。

「気になる子」に関して、本郷(2010)は障害の有無とは関係なしに、「顕著な知的な遅れがないにもかかわらず『子ども同士のトラブルが多い』『自分の感情をうまくコントロールすることができない』『多動である』などの行動特徴をもつ子ども」を保育者が「気になる子」として定義している。しかし、この定義も曖昧で、保育者の価値観や判断に依るところが大きいことがわかる。また、そのような子どもの「気になる部分」は、集団生活を送るうえで顕在化してくることが多く、保護者よりも保育者の方が気づきやすい。その子自身だけでなく、家族やまわりの子どもたちにも適切な援助をするためにも、そのような子どもの早期発見・早期対応に努めるべきである。

発達障害児や気になる子に対する保育として現在行われているのが統合保育である。障害のある子の発達を促進し、障害のない子の障害理解や思いやりの気持ちを高めることが期待されている。また「気になる」子どもの社会性の発達には、他児と遊びを共有する中で他児との関わりの経験を促す必要があるという研究もされており、障害児や気になる子に

とって統合保育は有意義であるといえる。しかし、保育者の中には「障害児への援助に手が届かなくなって、他の子に十分な援助ができない」といった悩みを抱えている人も少なくない。実際に幼稚園や保育所には様々なニーズをもった子どもがいる。それらの子どもを「障害のない子」と一括りに保育をすることにも限界がある。そのような中「インクルージョン」が提唱された。これは障害の有無に関わらず一人一人がニーズを抱えていて、それに対応することが大切であるというものである。今後インクルージョンを見通した行政の動きが期待されている。

## 3. 行事の意義・ありかた

園生活の中には実に多くの行事がある。筆者はその中でも、日常的な活動を集大成し、家族や地域の人に見てもらうことで、一人一人の子どもの成長・発達を、家族と保育者がともに確認しあい、次の保育活動を発展させるための活動として、運動会や生活発表会のような行事に着目する。

行事は保育の中で重要な役割を担っている。園や保育者にとっては、園のまとめや普段の保育を見直す機会になる。行事をより充実したものとするためには、保育者同士の連携が必要不可欠なのである。子どもにとっては、普段とは違ったことに取り組むことで、行事に期待感をもち、主体的に取り組んで喜びや感動、達成感を味わったり、遊びや生活がさらに意欲的になったりする。また、一つの目標に向かって仲間と協力することで、仲間意識が高まることも期待される。また、自分はこの園・クラスの一員であるというアイデンティティの確立にも繋がると思われる。地域や家庭にとっては、園の方針や子どもの姿を理解するきっかけになったり、または保護者の障害理解のきっかけになったりもする。

このように行事は保育の中で大きな役割を担っており、行事を充実したものにできるかが子どもの遊びや生活の充実、保護者との信頼関係に大きく関係していると言える。

## 4. 観察実験・インタビュー調査による事例検討

### (1) 研究方法

2014年5月から12月までの毎週金曜日に、X市のY幼稚園を訪れ、主に3歳男児の気になる子A児について観察を行った。10月に行われた運動会当日も観察し、後日担任保育者へのインタビュー調査

を行った。A児は普段、落ち着きがなく問題行動も見られるため、一日を通して主に加配の先生が個別について援助をしていた。

## (2) 結果と考察

A児は練習時も本番も他児と同じように遊戯や体操を踊ることはなかった。保育室の隅で加配の先生と見ていたり、他児の周りを走り回ったりしていた。当日もA児の落ち着きのなさが目立つだろうと予想したが、A児はあまり普段と変わらず、それがかえって目立たなく感じた。逆に他の子のほうがいつもと違う雰囲気戸惑ったり、保護者と離れられなくなったりして、保育者もそちらの援助に追われている様子であった。親子協競技では、A児は母親と一緒に遊戯を踊る様子が見られた。これは、普段から「ぐるぐる」「ころころ」といった言葉を好む様子が見られたため、遊戯の「じゃんぐるぐるぐる」のフレーズが気に入ったのではないかと考えられる。最後にご褒美のメダルを担当保育者から受け取る場面では、他児と同じように嬉しそうにメダルを受け取り、母親の元まで戻ることができた。

運動会でのA児の様子について担任保育者は、A児は周りのことが見えていない分、たくさん人がいても、あまり変わらなかったのだと思うと話した。3歳児にとって運動会をはじめとした行事はすべてが初めての経験であるため、「楽しい雰囲気を味わう」ということに重点を置いていると話した。運動会のための練習ではなく、日々の生活の中で、音に合わせて体を動かすことを楽しめるようにしている様子であった。これが「自然な流れの中での行事」だと考えられる。運動会において、みんなと同じように踊りを踊ることはなかったが、みんなと同じ場所にいられて、メダルも嬉しそうにもらうことができたことから、A児なりに運動会を楽しんだと考えられる。「行事に参加するにはこれをしなくてははいけない」といった偏見で子どもに無理をさせるのではなく、参加の形を一人一人に合わせたものに設定することが必要であると感じた。また普段から落ち着きのなさが目立つA児だけでなく、3歳児が全体的に初めてのことに戸惑っている様子であり、障害児や気になる子だけでなく、一人一人に合った援助が必要であると強く感じた。保護者と離れられない子、保護者が見てくれていると分かれば演技ができる子など、子どもの姿は様々であり、困ったことがあった場合は、他のクラスの加配の先生や、園長先生が援助に入ってくれた。園内での共通認識や協力体制の大切さを感じ、そうすることで臨機応変に対応できるのだと考えた。

運動会が終わった後も子どもたちの生活の中に、運動会での経験が取り込まれるように環境を設定していた。また、二か月後の音楽発表会では、A児は楽器を演奏したり活動したりせずに、椅子に座ったままであったと聞いた。音楽発表会あたりから、A児の落ち着きのなさが顕著になったと保育者は話した。行事への取り組みが続き、クラス全体で何かをすることが増え、落ち着かない雰囲気であったことが原因の一つであると考えられる。そのため、A児が落ち着かなくなったら、職員室で園長先生とともに過ごす時間が設けられるようになった。そうすることで、気持ちが落ち着いて、給食や帰りの支度などの次の活動に移りやすくなった。保育者は日々援助を工夫しながら子どもと関わっている。

## 5. アンケートによる行事への取り組みに関する調査

### (1) 研究方法

X市の公立の幼稚園・保育所に勤める保育者47人にアンケート調査を実施した。

### (2) 結果と考察

過去に発達障害児又は気になる子を担当したことがあると回答した保育者に対して、対象児一人を選別してもらい、行事における対象児の姿やその援助について質問した。内9割が男児であり、年齢は主に3歳から5歳までの幼児に関するものが多かった。半数以上が障害の判定有の発達障害児についての回答であった。

まず、行事において、どのような姿を目指して取り組むかという質問に関しては表-1のような結果になった。

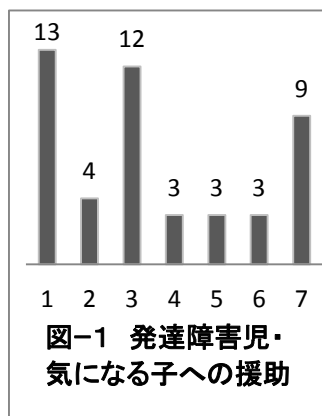
表-1 行事の目的意識

	障害のない子			発達障害児・気になる子		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位
行事を楽しむ	24	3	7	22	8	4
集団行動ができるようになる	3	6	8	3	10	10
個人の技能の向上	0	0	4	0	1	6
仲間意識が高まる	5	16	8	0	3	3
子どもの自己肯定感を高める	7	15	10	10	12	6
保護者の子どもに対する理解を深める	0	0	3	4	6	10
その他	1	0	0	1	0	1

障害の有無に関わらず、「行事を楽しむ」が一番回答数が多いことがわかる。幼児期の教育は遊びを通して行うことが基本であり、行事への取り組みも普段の遊びのように、子どもが楽しいと感じることが必須条件であると考えられる。その子の負担にならないよう、どの程度なら参加ができるのか、どのようにしたら楽しく感じられるのかを考えて援助すると

良い。前章で検討した事例においても、体を動かして踊ることではなく、A児なりに楽しさを感じられることを担任保育者が求めていることが導かれた。上位の2項目は、どちらも個人の満足感・達成感に繋がるものであると言える。その子自身が行事によって満足感・充実感・達成感といった内面の充実を得ることが行事の意義の前提として捉えられているということがわかる。障害のない子と、発達障害児・気になる子について差が見られたのは、「集団行動ができるようになる」「仲間意識が高まる」の項目である。障害のない子は「仲間意識が高まる」の項目の回答数が多かったのに対し、発達障害児・気になる子については「仲間意識が高まる」の回答数は低く、「集団行動ができるようになる」の項目の回答数が、障害のない子よりも多かった。内面的に仲間意識を高める前に、みんなと同じ行動をとれるようになることが望まれているのだと考えられる。また「保護者の子どもに対する理解を深める」の項目も、障害のない子と発達障害児・気になる子で差が出た。頑張る姿、戸惑う姿など、ありのままの子どもの姿を見ることで、子どもの姿を理解する重要な機会であると保育者が捉えているためだと考えられる。子どもの姿を知ること、保護者のかかわり方が変わった、子どもが落ち着いたりすることに繋がる。

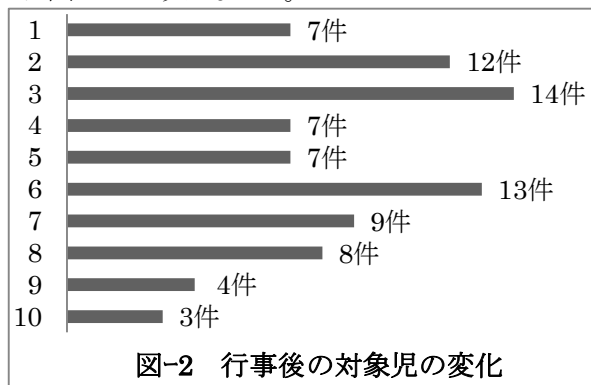
次に、行事における対象児の困った行動に対してどのように援助したかについて自由記述で回答を求めた。それらの記述を広瀬ら(2010)の分類を参考にカテゴリー分けをした。①場の設定・工夫②種目の工夫(参加度の調整等)③保育者がそばについての配慮④職員全体・保護者との共通理解⑤普段の生活を通して⑥友達関係・学級全体としての工夫・配慮⑦個人の練習方法の工夫、という分類である。



結果、図-1のようになった。数値としては【場の設定・工夫】、【保育者が側についての配慮】のカテゴリーに属する記述が多かった。したがってこれらの援助が、保育者が発達障害児・気になる子への援助に関して意識していること・効果を感じられたことであると考えられる。多くの記述にキーワードとして「視覚的に」と「個別に」という言葉が入っていた。発達障害児や気になる子は行事への取り組みのなかで、自分が何

をするべきか理解できず落ち着かなかつたり、不安を感じたりすることが多いと考えられ、それに対して目で見てわかる情報を与えるなどして安心して取り組めるようにすること・保育者がそばについて個別に関わっていくことが大切だと保育者が意識しているということが明らかになった。

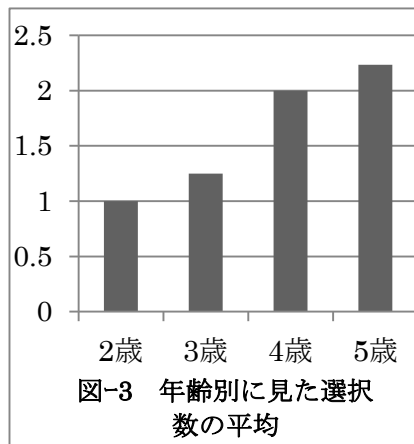
最後に、行事を終えて対象児にどのような変化が見られたかについて選択肢で質問を設定した。①運動能力など個人の技能が向上した②と面立ちへのアプローチが増えた③友達との会話がなくなった④保育者へのアプローチが増えた⑤気になる行動が減った⑥行事で行った活動を普段の遊びに取り入れるようになった⑦活動に積極的に参加するようになった⑧保護者の子どもに対する理解が深まった⑨変化は見られなかった⑩その他、という選択肢を設定し、結果は図-2のようになった。



ほぼすべての保育者が、行事のあと対象児になんらかの変化が見られたと答えた。

②③に関しては主に5歳児によく見られた。5歳児は友達同士の関係や仲間意識が強くなり、仲のいい子だけでなく、クラス全体に意識が向かう。行事でも個人で取り組むものではなく、みんなで協力して取り組むものが多い。そのような中で障害のない子が、発達障害児や気になる子の一生懸命頑張る姿を見て、新たな一面を知ることが出来たり、教え合うことで絆が深まったりすると考えられる。人と関わるのが苦手とされる発達障害児・気になる子でも、人と関わることの楽しさや喜びを感じられた結果だと考える。⑤に関しては、子ども自身が変わったことと、保育者の援助変わったことが原因として考えられる。行事を通してその子とのかかわり方を保育者が見直し、適切な関わりができるようになることで、子どもが安心して、落ち着いて生活できるようになり、結果として気になる行動が減るのではないかと考える。⑥に関しては対象児が行事を楽しんだ証拠であると言える。行事が終わっても遊びた

い、行事で得た達成感や満足感をまた味わいたいという気持ちから、普段の遊びに取り入れるのだと考え、これは子どもの活動の幅が広がるということに繋がると言える。また、「⑨変化は見られなかった」を除いて、年齢別に選択数の平均を見ると、図-3のような結果になった。この結果から見て分かるように、年齢が高くなるにつれ、行事後の変化は大きくなる。これは年齢が上がるにつれ、行事への目的意識が子どもの中で明確化されるため、行事によって得られるものも多いのではないかと考える。この結果は発達障害の有無にかかわらず、すべての子どもに当てはまることだと考えられる。しかし、障害のない子に比べて行事でストレスを感じたりパニックを起こしたりしやすい発達障害児・気になる子も、保育者の適切な働きかけがあれば、他の子と同じように成長することができるという結果は価値のあるものだと考える。このような変化を願いながらも押し付けにならないよう、配慮しながら援助することができれば行事とはとても意味のある活動になるであろう。



結果は発達障害の有無にかかわらず、すべての子どもに当てはまることだと考えられる。しかし、障害のない子に比べて行事でストレスを感じたりパニックを起こし

たりしやすい発達障害児・気になる子も、保育者の適切な働きかけがあれば、他の子と同じように成長することができるという結果は価値のあるものだと考える。このような変化を願いながらも押し付けにならないよう、配慮しながら援助することができれば行事とはとても意味のある活動になるであろう。

## 6. まとめ

本研究では、文献調査、観察実験、アンケート調査により、発達障害児や気になる子が行事に参加する現状や、意欲的に参加し、成長・発達を促すための保育者の援助について研究してきた統合保育において、障害のない子と障害のある子の交流や相互作用が求められている。障害のある子や気になる子が一般の幼稚園・保育所に通い、周りの子と一緒に生活することで、人と関わる力や自己抑制を身に付けたり、基本的な生活習慣を確立したりするなどの成長・発達が促されるという研究のもと、保育者たちは子どもたちがお互いに育ちあう環境・集団づくりを目指している。それは、普段の保育からでも十分に効果は期待できるが、行事はそのいい機会であることが明らかになった。行事とは、多くの人に見られるという点で、普段の保育とは大きく異なり、非日常的になり得るが、その内容な日常の保育の積み重ねであり、見られるということに意識を奪われず

ぎず、一人一人の子どもが楽しんで取り組むことができるように援助する必要がある。そのためには、一人一人に合った目標を設定する必要がある。子どもたちが行事を通して、「楽しかった」と感じる事が大切であり、どのような形でも、「自分はこのクラスの一員」と感じられれば、クラスのなかにその子の居場所ができる。クラスの中の居場所づくりに、行事の担う役割は大きいと考えられる。また、視覚的に、具体的に働きかけることで、ルールやきまりを理解することや言葉での指示を理解することが難しい発達障害児や気になる子も理解でき、安心して行事に取り組むことができるということが明らかになった。そしてそのように行事でうまくいった援助はきっと、その後の生活の中でもうまくいくに違いない。そのような点で、行事とは保育者にとって、その子との関わりを見直すいい機会となると考えられる。また、発達障害児や気になる子にとって行事で得られるものは、年齢に伴って多くなることが明らかとなった。その要因は、年齢によって行事に向けた子どもたちの意識の高まりが違うことが考えられる。筆者が目にした3歳児クラスではほとんど普段通りの生活をし、行事を特に意識させることはしなかった。しかし、4・5歳児ともなるとそうではないであろう。ひとつの目標に向かって取り組むことで、研究結果のような子ども自身や周りの変化が見られると考えられる。このように、行事とは保育の中で大きな役割を担っていることが明らかになった。保育者の関わり次第で、その可能性は大いに広がり、子どもたちの生活に潤いや刺激を与え、成長・発達を促すことができる。保育者はインクルージョンの視点からも、一人一人の子どもたちを楽しませるための援助を今後も考えながら保育していくと良いと考える。

## 文献

- ・青木一 深谷鋤作 土田康夫 秋葉英則 『保育幼児教育体系 第2巻4 行事・集団作り』1987年。
- ・本郷一夫 飯島典子 平川久美子「気になる幼児の発達の遅れと隔たりに関する研究」(『東北大学大学院教育学研究科研究年報』 2010年)。
- ・広瀬由紀 佐藤慎二 高倉誠一 植草一世 中坪晃一「保育所・幼稚園における「障害のある」子どもおよび、「気になる」子どもの活動参加に関する調査研究(3): 「運動会」に向けた活動展開における保育所・幼稚園の傾向に着目して」(『植草学園短期大学紀要』2010年)。